

# 雑誌論文が研究成果発表の手段であるのはいつまでか

土屋俊  
(千葉大学)

# 考えてみれば古典的テーマかも？

- 論文数で業績評価できない大学教員
  - 建築、デザイン、美術、音楽、その他芸術。しかし、高等教育(社会インフラ、教員養成)としては不可欠
  - 基礎学術分野(数学、物理、哲学、歴史、文学等)。しかし、やはり、高等教育には不可欠
- しかし、ピアレビューは機能していたはず
- ビアレビューと「論文」とは本来独立
  - ビアレビューは、(第三者による評価ではないのだから)「ギルド」的制度(“scientific community”なるものの位置づけ)
  - 「他に評価できる人がいない」ときには不可避
- 今こそ、学術の実践と社会的成果共有との関係について考える好機

# 研究成果を論文として公表しないと、研究活動は社会に貢献しないのか？

- もちろんそんなことはない
  - 非公開研究
    - 軍事研究⇒「国」が勝てばよい
    - 企業内研究⇒製品、薬が生まれ、生活が良くなり、富が増大すればよい
  - 基盤を構築する研究的営為
    - 資料の蓄積(過去の遺産の整理(索引、書誌等)、(広義の)媒体変換(翻刻、校訂、電子化等)
- ではいったい、論文で研究業績を評価するのはなぜか？意味があるのか？将来はどうか？
- もし論文刊行が唯一の形態でないなら、学術雑誌の将来はどこにあるのか？(今日は費用負担の話はしない)

# 研究成果のすべてが論文で表現できるものか

- そんなことはない
  - Scientific visualization
    - <http://www.astro.phys.s.chiba-u.ac.jp/netlab/pub/index.html>
    - アルゴリズム ⇒ 雑誌論文
    - アプリケーション ⇒ 分野論文(ウェブを参照)
    - デモ ⇒ ウェブサイト
    - 標準的引用は困難
  - 実験プロトコル
    - 論文が“Method”で終わっている?!

# 実験プロトコル

- 知見を付け加えない
- しかし、新発見の前提
- 普通の論文：序論⇒課題⇒実験デザイン・実施⇒結果⇒考察⇒結論
- Protocol論文：序論⇒課題⇒実験デザイン・実施⇒????????????????
- 評価は、
- しかし、各社が創刊(Nature, Wiley, Springer)

# 人文科学における展開

- 言語コーパス
  - 膨大な資料、しかし手作り
  - 再利用可能性
  - 解析ツールの開発
- 各種の電子化資料
  - 異本の再現
  - 校訂との関係
  - 研究ツール ⇒ 再利用可能性
- 伝統的にこのような作業を評価してきたが、、、

# Informal communicationの「表面化」

- 話を聞きに行く(訪問、研究会、学会大会、授業)
  - Podcasting
  - Blog
- 技を盗む(研究室に入る、弟子入り)
  - Protocol「論文」の一般化
  - 資料を鑑定する
- 抜き刷りをもらう
  - 機関リポジトリ
  - (メールで依頼、送付)
- 論文の書き方、発表の仕方を教わる(ゼミ、授業)
- 商業出版者の自覚的展開
  - NPG(Connotea), Wiley, Springer, RSC(Project Prospect), . .
- “Scientific community” の変質(二重帰属)

# 雑誌の役割の相対化

- 論文が研究成果の「結晶化」した形態である時代はもう終わる
  - － データベース、電子化資料、プログラム、実験方法、標準、特許などなど評価可能な研究途上の「副産物」が数多く存在する
- 論文自体にいろいろな段階がある
  - － 研究会発表、論文草稿(preprint)、刊行論文、機関リポジトリ掲載論文、
  - － 剽窃、盗用、あるいは捏造 ⇒ むしろ論文にいたるまでの家庭が重視される



# 論文雑誌の将来

- ないわけではない
  - 知識は命題によって表現される
- しかし、それは学術研究成果のごく一部になる
  - 知識の生産過程そのものに価値がある
- 論文雑誌においても
  - 評価の多次元化は大きな影響を与えるだろう
  - 分野ごとの異なりは明確に認識されるだろう
  - ピアレビューは行われるであろうが、それがコミュニティの判断であるという度合いは下がるだろう
  - コミュニケーションのための費用の大半を占める時代はおわるだろう